

第七回 文展概観

坂井犀水

第七回文展を觀て、吾人は昨年本誌に於て、第六回文展に就て述べたる所感の多くを繰返へすの必要を覺ゆ、然れども本誌の如き繼續せる讀者の多數を有する紙上に於て、再び似寄りたる記事を重複するは煩雜の嫌あるを以て之を避く。乃ち本年は主として文展の内部に就て所感を述ぶることとせん。

場内の修飾設備を重視せよ

文展会場の不完全にして、速に美術館を建設するの必要あることは、吾人の屢論したるところなるが、未だ之が實現を見るを得ず、年々彼の廢屋内に之を開くの不得已は遺憾の極なるが、さるにても、せめては場内の修飾、陳列法には、大に改良を施したし、室の區劃は大體に於て、不都合なしとするも、毎年第一部に於て、外周に細長き通路めきたる幾室を置くは、觀賞上適當の距離を得ず、其處に陳列せらるる作品には實に氣の毒なり。第一科、二科の看板の如きも甚だ粗末にして

美術的ならず、其他幕の張り方を始め會場内の設備に、總て今一段の美術的氣持を漲らせたし。會場狹隘の爲不得已と雖ども、列品と列品との間隔密接に過ぎ、鑑賞に適せざるも一弊なり、陳列其所を得ざる爲、光線悪しくして榮えざる作品も尠からず。要するに場内の修飾設備は可成之を重視するの必要を感ず。

一科益貧弱

第一部を第一科、二科に分設するの無意味なることは吾人の當

初より主張したるところなるが、

今回の第一回を觀て益其感を深うす、不幸にして吾人の主張は

適中し、第一科の運命は漸く危殆に瀕したり。

蓋し第一科設置の精神は、日本古畫の傳統を重んずるにありと聞きしが、此處

に集められたる作品に、毫も日本古畫の傳統の



筆二武島藤

とつう

見るべきなきは昨年に異ならず、審査員の作品の見るに足らざるは今に始りたることにあらざるが、一般出品中小室翠雲の「寒林幽居」の氣韻甚だ乏しきも技巧稍見るべきと、山田介堂の「積翠塔影」の南畫的氣分を藏したる外殆んど擧ぐるに足らず、松林桂月、小坂芝田の如き最も囑望せらるる作家にして、唯徒に勞力を費して俗惡なる色彩を塗抹せるに過ぎざるは惜むに堪へたり。大坪正義、高取稚成等に依りて代表せらるる土佐派なるものは、苟も古土佐の妙趣を味ひたるものに取り

ては、寧ろ憫笑を價するのみ。五百六十八點の出品より僅に三十三點を選抜したる此科の成績斯の如きを見て、吾人は呆るゝ外はあらず。況んや二科最低の標準を以てしても尙數點の排斥を要するものあるに於てをや。

特に一言指摘したきは此科審査員の割合が、南畫の末派と土佐の末派に偏重せることなり。

二科の進取的氣勢

一科に比して二科の研究努力は多とすべし、新を競うて奇に奔り、形式を重んじて内容を輕んじたるものも少からざるも、概して吾人は其進取的氣勢を看取す。

全體を通じて、題材を植物動物に取り寫生を基礎としたる裝飾畫の傾向と、輕き滑稽味を雜へ漫畫風を帯びたる傾向の著しきを見る。前者は徒らに裝飾風を誇張して、失敗に陥りたるも少からねど、吾人は此傾向を咄ふものにあらず、此種の作品の内、吾人は柳原紫峯の「夕榮」を賞す、陳列甚だ其處を得ず爲に畫面の觀賞に便ならざるを見れば、頗る冷遇せられつゝあるものゝ如し。後者の漫畫風を帯びたるものゝ内、牛田鷄村の「町三趣」を擧げんか、稍作爲に陥りたる構圖と、稍輕巧に過ぎたる畫面は、多少の反感を招き易きも、一種の情調と古趣を現はせるは悔るべからず。

小野竹橋の「麥秋」と、土田麥僊の「海女」は、共に後期印象派の感化を語る、唯形式を追うて内容の充實を缺くを惜む。

審査員の作

品は概して振はずと雖ども、局部に於ける筆技の鍊熟に於ては、流石に後進の及び易からざるものあるを見る。栖鳳の「繪になる最初」は日本畫にありては新奇なる着眼なるも、其捕へたる刹那は未だ渾然たる畫品を成さず、其部分々々に於ける筆技は容易に他の企及を許さざるも、畢竟局部の技巧のみ。大觀の「松並木」は獨特の構圖にして、天を摩するが如き松並木の梢のあたり、巧に自然の情致を寫せるも、全體の色調を誤りたると、局部々々の細描は却て興趣を淺薄ならしめたり。廣業の「千紫萬紅」、春舉の「春夏秋冬」共に新奇の

おだやかな朝



中川八郎筆

試なきも是亦筆技の鍊熟を味ふべく、玉堂の「夕月夜」は其最得意とする畫境にして、稍薄弱の感はあれど能く靜穩なる自然の情趣を寫せり。櫻谷が徳川初期の畫風を温ねて一機軸を出さんとせる、成否を問はず、其氣力を賞すべし。

其他結城素明は益裝飾美術的興味に耽り、富田溪仙は益逸氣を求むるも、共に成功せざりき。

洋畫の沈滯

洋畫の沈滯振はざるは意外なり。石井柏亭新に歐洲新藝術を味ひ來り、鍊達なる筆技に、明敏なる觀察の結果を加へ、「N氏と其一家」「滯船」並藏」共に日本的洋畫の端緒を開かんとし、長原孝太郎の「殘雪」は超然たる態度を以て高雅なる裝飾畫を成せり、趣味の人獨り其眞價を認めん。南薰造の「春さき」は、例に依て物象を以て文字に代へたる詩なり。藤島武二の「うつゝ」は描法の新様と色彩の豊富を以て異彩を放ち、齋藤豊作の「落葉かき」「夕映の流」共に特殊の鮮かなる色を以て自然の面影を傳ふ。坂本繁二郎の「魚を持て來て吳

れた海女」は主觀的なる氣分を有ちながら、去年の「うすれ日」の如き快き統一なきを惜む。

審査委員の作中、岡田三郎助の「女の顔」の一點寶石の如くに輝けると、中川八郎の「おだやかな朝」の色調の快きを擧ぐ。

彫塑亦振はず

彫塑亦振はず、技巧の鍊達なる朝倉文夫の「含

羞」は其「土人の顔」の如く生氣なく、藤井浩祐の「若者」「坑内の女」も其「髪を洗ふ女」の鮮味なく、建昌大夢の「おゆのつかれ」も亦其「ねむり」の無邪氣なし、共に作爲の痕を留むればなり。

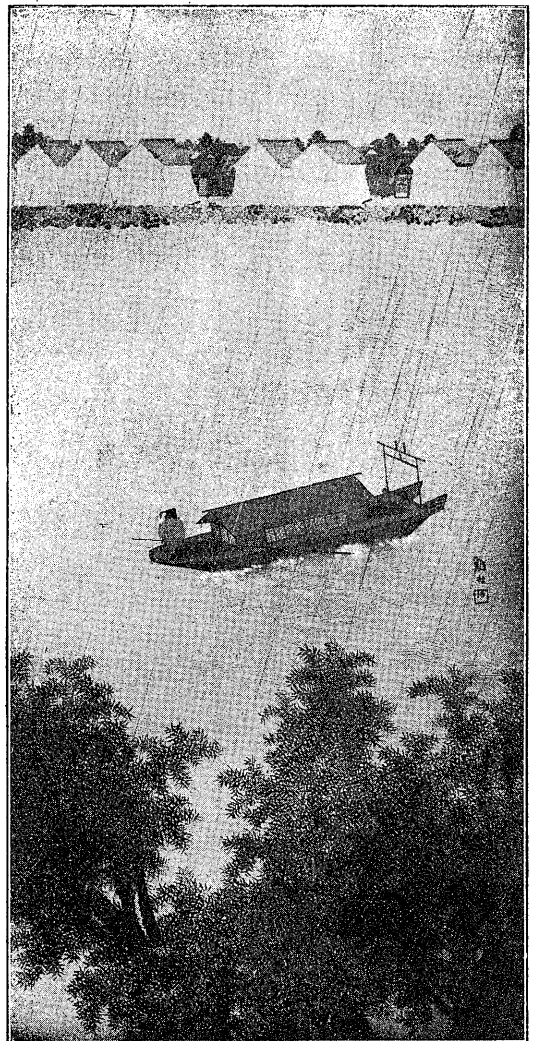
木彫には雲海の「沙金」に僅に骨董的興味を見るのみ。

通觀轉た寂寞の感あり

各部を通觀し去つて、吾人は轉た寂寞の感なくんばならず、そは吾人が茲に列擧したる作品も、唯場中に於て比較的吾人の注目を惹くと云ふに過ぎず、之を例年に比して、特に傑出せざるのみならず、或は稍劣れるが如く感ずるを遺憾とす。



筆雲翠室小居幽林寒



筆村鷄田牛 (中の趣三町)雨時